

鹿首—16号

エッセイ—山本のりこ

私はカナダのトロントに住んで30年近くが過ぎようとしています。

日本からトロントは遥かカナダで、トロントで夢を見ている時間が日本の現実の時間で、夢と現実が同じ時間に行われている事を考えますと、更に遠くに感じさせられます。私は日本やカナダで、もう50年以上になるでしょうか、ダンスやマイムを通してパフォーマンスを演っているのですが、感じる事はマイムやダンスは、言葉を使いませんが、国籍を問わず殆どの人に理解してもらえると信じます、特に感情の表現は人の心と共鳴する事が出来ると切に感じます。ですから本当の気持ちで表現するようと思うのですが、舞台での本当の気持ちというのはどんな事だろうと考えますと、本当と言うのは、現実に関わった時の感情や状態ですのでそれは無理な事です、舞台ではその感情や状態や情景をイメージしそれを噛み砕いて、自分のイメージの中に入れ、あーでもないこうでもないと言ったり、薄めたりしながら自分が本当に感じる所を見つけ出して表現する、それはもしかしたら錯覚かもしれませんが、それをグッと本当の所に持って行くと言う技というかテクニックを長い間演っていると身につけられる様になるのかもしれませんが。言葉にすると何か迷路の様ですが、簡単に言いますと頭を使わずに感覚やフィーリングに委ねる事が多いです。

マイムに関して考えますと、一般にはただ単にものまねをしているように思われがちですが、私としてはあるイメージを最大限に使い、観に来てくださっている方に私のイメージの中に入って頂き感じてもらう事がとても魅力です。

昨年トロントから北に3時間の所のハリバートンと言う街でのイベントで、私はマイム/ダンスの『The Crane』を演ったのですが、次の日街を歩いていましたら女の方が近寄って来て、『昨日は一緒に空を飛びましたよ、ありがとう』と言われとても勇気を頂きました。マイムはイメージを共有する事が出来るのです。

ダンスに関して考えますと、ダンスは心と体の対話かとも思います。心をいかに体の隅々まで響かせる事が出来るか、若い頃は体ばかりが良く動くので心を忘れてしまう事がありましたが、歳を取りますと心が体の隅々までなかなか届かず心ばかりが風船の様に膨らんでしまいます、すると体との対話に変化が現れます。朽ちてゆく体との対話ですので、労わりや慰めやそして時には愛おしさの話題が多くなる様

に感じます。そして私にとっては素材である体を殆ど毎日のように感じながら動かし、心をニュートラルに保って行くメンテナンスに心がけなければなりません。

ある人がダンサーは体の事を一番良く知っていると言っていたのを聞いたことがあります、陶芸を始めても自然に体の形になってしまったり、絵を描きますとダンスの絵になってしまったりしていましたが、今では和紙を使ったミックスメディアで作品を創っています、和紙を触っていると、不思議に昔を思い出します、子供の頃住んでいた家の、しょうじや襖や床の間にかけてられた掛け軸、生花、欄間、廊下、雨戸、すだれ、家の中に降り注ぐ光と影、柱時計の音、父と母の声ノスタルジックな気分させられます。日本から遥か遠くに住みながら、帰らない昔の夢を見ています。